

I 主の十字架の苦しみと救いの恵み

「彼らはイエスをゴルゴタ（訳すと、「どくろ」の場所）へ連れて行った」：22

「彼らは、没薬を混ぜたぶどう酒をイエスに与えようとしたが、イエスはお飲みにならなかった」：23。没薬を混ぜたぶどう酒は、処刑する前に、苦しみをやわらげるために、感覚を麻痺させる為に囚人に飲ませるのが、ユダヤの習慣だった。イエスがこれを拒否されたのは、神によって与えられる苦しみ（私達の罪の為に身代わりに受けておられる苦しみ。）を、すべて味わう為だった。主に心から感謝します。

「それから、彼らは、イエスを十字架につけた」。「十字架」の刑は、ローマの極刑で、最も罪深い者を処刑する方法だった。最も苦しい刑だった。イエス様の御手と御足には釘が打ちつけられ、肉と骨が裂け、激しい痛み、命であるご自身の血が、したり落ち流れ続け、命が削られ、のどが渇き、苦しみが増す。「彼らがイエスを十字架につけたのは、午前九であった」：25。午前九時から午後三時まで（：33）、続いた。イエスは、私達の罪（不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、憎しみ、恨み、憤り、党派心、分派、ねたみ、酒に酔い悪い事をする、悪い遊びにのめり込む、悪徳による不正、嘘、偽り）の贖い、償いとして、罪のない聖い血を流された。感謝します。如何ばかりの苦しみだっただろうか。想像を絶する。その苦しみの重さは、私達の罪の重さを示すと同時に、主の私達への愛の重さ、深さ、広さ、暖かさを示す。感謝します。

「道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。『おお、神殿を打ち壊して三日で建てる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ』：29, 30。人々は、何も悪い事をされず、深い愛を示されたイエス様をののしった。主は、どのようにののしられても、ののしり返すことをされなかった。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私達の罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです」（I ペテロ2：22-24）。

「祭司長たちも同じように、律法学者たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。『他人を救ったが、自分は救えない。キリスト、イスラエルの王さま。今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから。』また、イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをののしった」：31, 32。あざける人々さえ、イエス様の事を「他人を救ったが」と言った。それほど、イエス様は、多くの人々の病を癒し、奇蹟を行い、助けられた。「自分は救えない」とあざけられた。主は、自分を救えない無力な救い主ではなく、私達が救われる為に、あえて、自分を救われなかったのである。「十字架から降りてもらおうか」とののしられた。イエス様は、神であるのに、人々の身代わりに死ぬ為に、人となられたが、多くの奇蹟を行える神でもあられたので、この時も、十字架から降りて、力を見せつけ、あざける人々を、「あっ」と言わせることもお出来になった。しかし、あえて、十字架から降りられなかった。

もし十字架から降りられたなら、すべての人々、私達の救いが成就されなかったからである。私達の救いの為に、十字架から降りずに、十字架に留まり、私達の罪の贖い、償いを成し遂げて下さった恵みを心から感謝します。主は、私達の為に最大の苦しみから逃げられなかった。感謝します。

「さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。そして三時に、イエスは大声で『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは訳すと『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」：33、34。イエスは、これまで常に、「わが父」と呼びかけてこられた。「わが神、わが神」と言う呼びかけは、この箇所が初めてである。ここでは、私達全人類の罪の裁き、呪いを受けられ、御父と御子の関係の断絶が起きていた。それ故に、神の御子ではなく、全人類の罪人の代表としての罪人として神にさばかれ、神との断絶という呪いを受け、完全に神に見捨てられ、こう叫ばれたのである。私達の罪を一身に受け、神に呪われ裁かれ神に見捨てられたので、罪人である私達が、神に見捨てられず、救われる恵みがあるのである。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブル13：5）。「神は、罪を知らない方（イエス様）を、私たち（罪人）の代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方（イエス様）にあって、神の義（神に罪を赦され、神と正しい関係になり、神に受け入れられる）となるためです」。「キリストは…自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死（ただの死ではなく、神に呪われた罪人としての死、神との断絶の死）にまでも従われました」（ピリピ2：8）。

「それから、イエスは大声をあげて（「完了した」ヨハネ19：30。「父よ。わが霊を御手にゆだねます」ルカ23：46）息を引き取られた。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」：37、38。旧約時代の神殿の幕は、人間の側の罪の故の神との親しい交わりの「仕切り」を象徴していた。不思議な奇蹟が起きた。主の十字架の贖いの完了によって、ゴルゴタから離れていた神殿の幕（神と人の仕切り）が裂けた。これは、主の十字架の御業の恵みによる新しい時代の幕開けを示す。「私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所（神の臨在される所）に入ることができるのです。イエスのご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。…私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか」ヘブル10：19-22。

Ⅱ 主の十字架の苦しみと救いの恵みへの応答

1. 自分の罪を認め、その罪の為に、主が十字架で身代わりに死なれたことを信じ、心に主を救い主、神として迎え入れる。
2. 主への信仰告白として、バプテスマ、洗礼を受け、三位一体の神との交わりと主の教会の交わりに加わり、互いに主と主の御言葉の恵みを分かち合い祈り合い支え合う。
3. 日々、自分の罪を告白し、主の十字架の血で赦され、きよめられる。
4. この受難週、十字架の主の苦しみを、深く思いながら生活し、救いを感謝する。